

Münster 大学での融合研究ディスカッション

所属: 名古屋大学大学院 理学研究科 生物有機化学研究室

学年: 博士後期課程 2 年

氏名: 大橋咲南

出張先: ドイツ・ミュンスター大学

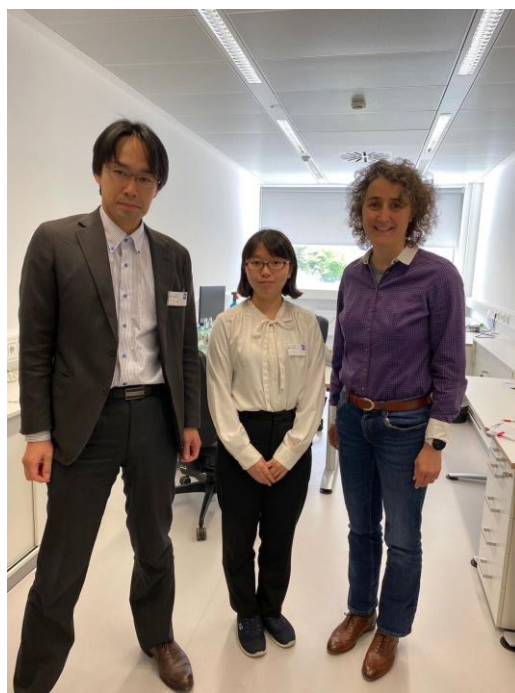
出張期間: 8 日間 (滞在 6 日)

出張目的: IRTG joint symposium 参加

【概要】

5 月 12 日から 19 日の間、ドイツ・Münster 大学に訪問し、IRTG joint symposium に参加した。シンポジウムは 2 日間開催され、その前後の日程は現地学生企画による大学周辺の散策があった。

シンポジウム 1 日目には名古屋大学、Münster 大学の学生によるポスター発表と、先生方による講演をお聞きした。2 日目は、同研究室の准教授 木村康明先生とともに、融合研究に向けたディスカッションを Münster 大学に所属する Anna Junker 先生、Andrea Rentmeister 先生 (Picture 1) と行った。その後、Münster 大学の女性教員、学生とともに、女性研究者の在り方や課題解決法等に関する話し合いに参加した。



Picture 1

木村康明先生、Andrea Rentmeister 先生と

【所感】

シンポジウムに関して

今回のシンポジウムには化学を中心に研究を行う、様々な分野の教員、学生が参加しており、講演や発表ではこれまでに聞いたことのない話が多く、大変勉強になった。研究室では英語を使用することもあるため、自身の分野と近い話は理解できた

が、異なる分野の先生の話は難しいと感じた。2日目のディスカッションでは、Münster大学の先生方から現在自身が行っている研究に対するアドバイスをいただいたり、実際に留学をして研究するならどのようなことができるかなどのお話を聞かせていただいた。Rentmeister先生には研究室も案内していただき、ラボにある実験装置のお話や、現在ラボに所属する学生とも話し合う時間をいただいた。実際に留学をすることになった際、どのような実験が行えるか、ラボの雰囲気はどのような感じか、など直接訪問することでしかわかりえないことをたくさん知ることができ、有意義な時間だったと感じている。

現地学生との交流に関して

シンポジウムの前後には、現地学生の企画によるMünster周辺の紹介・散策により交流を深めた (Picture 2)。今回の滞在では、ドイツ人の学生と英語を使ってコミュニケーションをとる機会が多くあった。会話の中で、もう少し英語を話せたらと感じる場面が何度かあった。そのため今後は、自身の研究を遂行するのに加え、もっと英語力も磨いていきたいと感じた。



Picture 2: 名古屋大学、Münster大学の学生と